

伯耆町障害老人をささぐえる家族の会

知ってくださいます私たちの会を！

「ぼけたら何にもわからなくなるの？」

ぼけの人は、何もわからないう「痴呆」の人ではありません。そのことがわかってくるまで、痴呆という言葉は、「認知症」と改められました。

認知症の人は、物忘れや、時・場所がわかりにくくなったり不安を感じ、生きることが不自由になってくるのです。

最近では、テレビでも介護や認知症、うつ病などの話題を取りあげたり、関連した書物も出版され、多くの人への啓発に貢献しています。

また、以前は隠そうとしていた家族や本人も、少しずつ社会に向けて語っていくことになっています。そうすることが、介護を楽にし、安心して暮らせる地域になると解ってきた

からです。

多くの人が、自分がその立場にならないと、考えられなかつたりわからなかつたりするのですが、誰もがいずれ直面する『老い』『障害』を考えた時、みんなが安心して暮らせる街づくりを、私たちは進めていかなければならないと思います。

私たち家族の会には、長年認知症の家族を介護してこられた人が何人かおられます。そうした先輩方の話を聞き、日頃の介護の愚痴を話すうちに、介護に疲れ、精神的にまわがっていた人たちが、「そんなにがんばらなくてもいいのだ。」

「話を聞いてもらえ、少し楽になった。」と言われます。そんな家族の会のみなさんの介護体験をご紹介します。

介護体験記①

認知症の義母を

十五年間介護して

十五年前に義父が他界した途端、物取られ妄想が始まった義母を、在宅で介護をしています。

義父が他界する二年前に私が二ヶ月ほど入院していたことがあったのですが、退院してみると義母の話す内容が以前の義母と異なり何か気になりましたが、義父の看病や自分の留守のために疲れが出たのだからと思っておりました。ところが、そのうち状態が悪化してしまいました。

義母は近所に行って、「手ぬぐいがなくなったので返してもらってくれ。犯人は嫁だから」と頼んだそうです。それから毎日「衣類を返せ、お金を返せ。」の繰り返しで、私

は腹が立って、泥棒なんかする訳がないと言いつつ続けた。

義母は家族がいる時は全く変わったことがなく、普通と変わらない義母でしたが、みんな仕事に出かけて、私と二人になると、顔つきが違ってきて、「泥棒、返せ、返せ。」の暴言が始まります。家族と相談をして病院に行き診てもらったところ、認知症でかなり進行してしまいました。

それからはますます妄想がひどくなり、毎日大きな声を出して葛藤の日々でした。

夫の兄弟に話をしたので、夫がなかなか認めてもらえず、何度か悔し泣きをしました。泣くともやもやがすつと消えて、またがんばることができました。そんなことの繰り返しでしたが、今では義兄弟もよき理解者になってくれています。

「認知症は早期の対応が大切です。」

認知症は「物忘れ」と「判断力低下」が起る脳の病気です。病気には必ず原因があり治療により治るものもあり

ます。

しかし認知症の初期の症状は分かりにくいことが多く、対応が遅れがちです。今までと何か違うなと気づかれたら、主治医や専門外来、地域の保健や、福祉機関にまずはご相談ください。近くにいる家族が一番変化に気付きやすいと言います。家族も積極的に病気に詳しい情報を得るようになりたいものです。

介護する家族にとっては、家族の協力や地域の理解が気持ちを楽にしてくれます。進行していく症状を元に戻すことは難しいですが、周囲の人の言葉がけが介護への活力となります。

次回家族の集い

【とき】

十一月二十四日(木)
午後七時三十分

【しるし】

溝口公民館

【問合せ先】

代表世話人 大森紀子
☎六二 七二四三
溝口分庁舎 総合窓口課
☎六二 〇七一